

広川町町制施行60周年記念事業

絵画コンクール 題目「未来の広川町」

最優秀賞



野中 ^{じゅり}樹佳
上広川小学校 6年生

私の中の広川町のイメージは、「自然」が多くて美しいということです。また、広川町でとれたくだものや野菜は、とてもおいしいし、初夏の夜に飛ぶほたるはピカピカ光ってきれいです。こんな広川町が大好きです。未来の広川町でも自然が大切にされ続けられればうれしいなという私の思いを絵にえがきました。



優秀賞



田中 ^{あい}愛
上広川小学校 6年生

この絵は、2人の女の子が雲にのって、未来の広川町へ旅をしているところです。広川町のいいところをたくさんまとめました。私の思う広川町のいいところは、「自然」「仲良し」「特産物（いちごなど）」「かすり」「空気がきれい」です。まだまだたくさんありますが、明日も100年後もずっと続いてほしいと思い、この絵をかきました。この絵を見て、「未来の広川町もこんなだったらいいな」や「すてきな広川町だね」と思われたらとてもうれしいです。





有 働^{たい} 太^{せい} 晴
中広川小学校 5年生



ぼくの広川町の未来の絵は、若い人も年よりの人も仲良く笑顔で暮らせる広川町をかきました。全部で7つの事を絵にかきました。一つ目は、自然です。道路や森などをかいて人がいやされるといいなと思いました。二つ目は、伝統です。未来の人たちが広川町の伝統を守れるといいなと思って稲員孫右衛門のため池を残した絵をかきました。三つ目は、産業です。ビニールハウスの中で、いちごやガーベラを育てているところをかきました。四つ目は、思いやりです。歩道で若い人が、年よりの人が歩くのを手伝っている光景を絵に入れました。五つ目は、健康です。誰かがけがをしたら、ビルの上にあるヘリコプターで、すぐに助けに行って病院へ送っていけるようにかきました。六つ目は、遊びです。誰でも外へ出て元気よく仲良く遊んでいるようにしました。七つ目は、エコです。ビルの横に太陽の力で動く車をかいて、いつ、どこへ、だれでも、いろいろな場所にガソリンなどを使わずに走れる車をかきました。



江 口^{まい} 舞
下広川小学校 6年生

私は近い未来の広川町をえがきました。広川町は、自然が豊かなので、そのことを広川町以外の人たちにも知ってもらいたいと思ってえがきました。広川町は、交通の便があまりよくないので、電車ができれば、もっと多くの人たちに来てもらえるので、新幹線をえがきました。新幹線の車体には、広川町の特産物をかきました。車体にかいた理由は、遠い未来になっても残っていてほしいと強く思ったからです。



絵 画 コンクール	題 目：「未来の広川町」	時 期：夏休みに実施
	実施学年：小学校5年生・6年生(383人)11クラス	
	審 査：1クラス3人程度 計33人を学校から選出	
	最優秀賞：1人 優秀賞：3人を教育委員会で選出	
	表 彰：11月7日(土) 広川町町制施行60周年記念式典で表彰	

作文コンクール

題目「私が描く広川町の未来」

最優秀賞



「ほーのーがしょ」

広川中学校 3年5組 久保田 耕陽こうよう

「ほーのーがしょ」

これは、広川の方言で力作業を協力して行うときの掛け声だ。昔はあちらこちらでよく聞かれたそうだが、今ではほとんど聞かれる事がなくなった。

広川町の平成二十七年八月一日現在の人口は一万九千九百十三人。三村合併当時の昭和三十年の人口は一万六千三百二人。六十年間で約三千五百人増加している。この数字だけを見ると人口増加がみられる活気のある町のように見える。しかし決してそういう訳ではない。

昭和三十六年入学児童数は上広川小学校百十三名、中広川小学校百三十三名、下広川小学校六十一名合計三百七名。平成二十七年は、上広川小学校三十名、中広川小学校百十七名、下広川小学校三十三名合計百八十名。百名以上減少している。なぜだろうか。

僕は二つの問題を考えた。

一つ目は、少子高齢化が進んでいることだ。僕は三人兄弟である。両親共働きで保育園や祖母の力を借りてどうにか子育てが出来たと母は言う。子どもを持ちたくても子育てに十分な環境がそろわず、あきらめる人達がいるのかもしれない。

ところで、広川出身の両親が子どもの頃遊んでいた場所は川だったそうだ。子ども達だけで川で遊ぶのは当たり前だったという。なぜそんな危険な事をしていたのだらうと思った。しかし危なくはなかった。その頃は汲み場というのがあり、そこでは洗い物などをしながら会話を楽しむ大人達がいたそうだ。地域の人達に見守られながら子ども達は大人に成長できた。現在は電化製品の進化が著しく、汲み場で集う人達はいなくなった。近所との交流も最低限に

優秀賞



「広川町の現状と未来」

広川中学校 3年1組
服部 祐季ゆうき

「広川町の課題と対策」

広川中学校 3年2組
川島 尚大なおと



なっている。しかし、僕はみんな交流を望んでいないのだからと思う。

今、若者の間では、シェアハウスが人気を集めているそうだ。経済的な事を考えてという理由もあるのかもしれないが、交流を求めている若者がいるということは確かだ。実際僕の姉は異世代交流のできるバリアフリー対応の戸建て集合住宅を作りたいと、大学で住居建築の勉強をしている。年配者は知識を提供し、若者は力を提供する。そんな関係ができればみんな安心して子育てできるのかもしれない。

二つ目は、特に東部地区での人口減少である。小椎尾地区などは学校へ行くのにも商店に行くにもたどり着くまで時間がかかる。そこで、住み慣れた土地を離れる人が多いそうだ。家を離れた人達にUターンを呼びかけたとしても職場までの通勤距離が長く、不便だという言葉が返ってくるかもしれない。

しかし、本当にそうなのだろうか。

小椎尾地区から広川インターの高速道路を利用すれば、約一時間で福岡市内に行ける。JRや西鉄電車利用で約一時間半。関東では当り前の通勤時間だ。また、高速インターネットの普及により、必ずしも出社しなくてもできる、在宅の仕事も増えているそうだ。

先日、徳島県神山町の田舎再生の記事を見た。環境の良い自然の中で仕事ができるということでIT企業が次々に進出をした。その結果、六十年間で二万一千人から六千人までに人口が減少していた町で、転入者が転出者を上回った。さらに、二百件もの予約待ちもあるそうだ。地域全体が力を合わせ、その土地の良さをアピールしていった結果だろうと思う。そこで仕事ができ環境を整え、高いスキルを持った人達の転入を求めていくことも、これからは必要なのだろう。人が増えればバスの本数も増え、商店もできるはずだ。

これは、これから大人になっていく僕達の仕事だ。僕は将来、進学や就職等で広川の土地を離れるかもしれない。しかし、一生懸命勉強してスキルを身につけ広川の創造的再生に力を注いでみたい。二千四十年には五百二十三の市町村が消滅の危機に直面するといわれている。その中に広川町を入れてはいけない。

新しく元気な

「ほーのーがしよ」

が飛びかう広川町を、力を出し合って作ってきたい。



「広川町のこれから」

広川中学校 3年4組

山口 修平

作文コンクール

題目：「私が描く広川町の未来」

実施学年：中学校3年生(178人)5クラス

時期：夏休みに実施

審査：1クラス1人～2人 計10人を学校から選出
最優秀賞：1人 優秀賞：3人を教育委員会で選出

表彰：11月7日(土)

広川町町制施行60周年記念式典で表彰